

# 21世紀ひょうご市民学会 会報

18号  
2011年9月29日

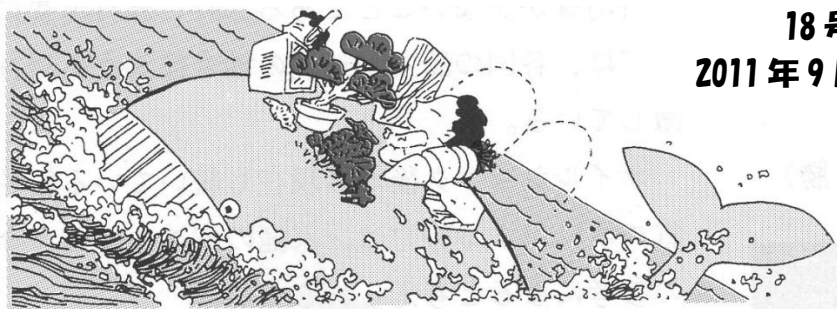
—編集・発行—

21世紀ひょうご市民学会

「神戸生活創造センター」登録番号 630

代表世話人 澤木昌典

<http://www.hyogo21ctzn.com>



台風12号に伴う豪雨は、紀伊半島を中心に甚大な被害をもたらしました。被災された皆様方に、心からのお悔やみとお見舞いを申し上げます。

## 第5回総会開催さる —5周年記念行事を計画—

今年で5年目を迎えた21世紀ひょうご市民学会の総会が平成23年7月16日(土)午後2時から、神戸生活創造センター(神戸クリスタルビル・4階)において、澤木昌典代表以下会員26名(委任状を含む)が出席して開催されました。

まず、平成22年度会務・事業報告並びに収支決算報告では、平成22年度に実施した事業の概要および収支決算が報告され、いずれも異議なく承認されました。

平成23年度事業計画は前年度同様、興味深い話題を提供する「知的サロン」(隔月)、特定テーマを研究する「研究会」(隔月)を柱とするほか、当学会発足5周年を記念して「記念特別行事」を実施することになりました。記念特別行事の内容については世話人会に一任されました。なお、平成23年度の研究事業のテーマは「高齢者問題」に決まりました。

平成23年度収支予算は、5周年記念特別行事に特別支出を計上する予算案が異議なく承認されました。

平成23年度役員(世話人)については、総務(広報担当)に松本暢之氏、知的サロン担当に野口民治氏と松原宏治氏、研究活動担当に塩野勝氏と中川政美氏がそれぞれ前任者に代わり就任し、その他役員については留任が決まりました。

このあと、野口民治氏の平成22年度研究成果の発表があり午後4時前に終了しました。

### お知らせ

- 第20回知的サロン 10月13日(木) 15時~17時  
場 所 : 神戸生活創造センター 5階学習支援室  
話 題 提 供 : 松本 暢之 氏

\*出欠用返信ハガキを同封しています。

- 第2回研究会 11月10日(木) 15時~17時  
場 所 : 神戸生活創造センター 5階学習支援室(予定)  
テ - マ : 「高齢者問題」 ◇フリートーク『私の健康法』





野口さん

本研究はフィールドワークを中心に「まちなみ景観づくり」を巡る課題を探るものとして2009年9月にスタートし、2011年5月まで、当学会代表・澤木昌典教授による特別講義と3カ所の実地見学を含め10回の研究会を開催した。参加者の意向により研究対象として、かつて城下町であった大和郡山市、尼崎市、たつの市の3市の旧市街あるいは旧城下町部分を選んだ。

以下、議論の中から抽出された、この3者の比較及び共通する課題について要約する。

## 1. まちの歴史的背景と性格、まちなみ景観の現状



尼崎市住宅

3地区のまちなみ景観の現状には、明治以降の近代化への歩みと2度にわたる災害での破壊とその復興が大きく関わっているようである。

尼崎市は大都市・大阪の入口にあり、交通の大動脈が通っていることから、いち早く近代的商工業都市へ転進した。街道沿いの古い歴史を持つまちではあるが、江戸期以前のまちなみのほとんどが早期に姿を消している。さらに戦時及び阪神淡路大震災による旧市街地の破壊と復興でこれが加速された。このため、数軒単位での邸宅の集まりは別として、古いまちなみ景観として、ある程度かたまって残っているのは寺町周辺のみである。

ただ、震災後の復興に際して注目されるのは、それ以前に「尼崎市都市美形成条例」が定められるなど、「都市美」へ関心が向けられるようになっていたため、築地地区などでは、行政が主体となって、旧街道の面影を残しながら、現状の用途に合わせた市営住宅兼商店街を建設するといった、新しい試みがなされたことである。いうなれば新旧融和したまちなみ景観づくりであろうか。これは大和郡山市の藪町筋（いのまち）の改修事業でも言える。

大和郡山市は大阪からかなり離れた位置にあり、モータリゼーションの波が高まるまでは、急速な都市化を免れてきた。また古都奈良に隣接していることが幸いして戦時の破壊も免れ、その結果部分的ではあるが



大和郡山市柳通

旧城下町の雰囲気が残されてきた。

しかし、昭和40年代以降、隣接地域に工場誘致が進められ、かつ幹線道路の拡充によって交通の便が増してくると都市化への歩みが加速した。単体として城址や明治、大正期の貴重な建物が残っているものの、「まちなみ」として歴史を伝える景観は、主として昭和中期以降の面影が残る柳町通りの商店街ぐらいであろう。

ここでは、景観保全を目的にした市の条例等はつくられていないが、国の施策として藪町筋の改修が進められている。先の尼崎市築地地区のように、旧来の面影を残しつつ道路を拡張する方式がとられていて、火の見櫓を模した消防施設や大正期の医院などを配した、新旧融和型の「日本のまちなみ」景観が生まれようとしている。



たつの市

これら2市が比較的早くに近代的都市への道を歩んだのに比べ、たつの市龍野地区は都市化への出足が遅れた。また最近まで上記2市ほどには交通面で

の利便性が良好といえなかったようだ。歴史的まちなみ景観の保全にはこれが幸いしたと思われる。

かつて、姫新線の通過に反対した時代もあったというが、たつの市の産業地帯は城下町地区から離れて計画され、県による景観形成地区指定が早かったことと、住民の強い愛郷心が加わって、現在のような良好なまちなみ景観の存続を可能にしている。

「まちなみ景観」を一つの文化遺産として保存すべきという考え方が市民権を得て定着するのと、近代的都市化あるいは豊かな財政を求めて工場誘致へ向かうのと、この時期の早晩が、3市の歴史的まちなみ景観の現状に反映しているといえよう。

## 2. 都市の規模とコミュニティ

都市が近代化すると、また、その規模が拡大していくと、住民の地域への愛着心は薄くなり、地域のまちなみを保全することに無頓着になっていく傾向が強まる。

都市に人々が集中する主な要因は「職の選択の多様

性」であろうが、ほかに「近所つきあいの少ない・近所からの「目」を意識することが少ない」ことや「生活の自由度が高い」ことも誘因の一つとする説もある。この傾向は大都市ほど強まる。

大都市では住居は、極論すれば、単に寝泊りする場所に過ぎない。都市化が進むほど外部からの移住者が増え、所有関係も一時的・流動的なものの比率が高くなり、通勤・通学等の利便性、買い物等日常生活の利便性、娯楽施設等への位置関係、居室の居住性などは大きな関心事となるが、住居を取り巻く環境への関心を寄せる住民は相対的に低くなる。自ずと、地域共同体への帰属意識も、まちなみ景観を保全するという意識も薄れていく。

今回、龍野地区で感じられたのは、このまちの住民であることを誇りとする愛郷心がまちを美しく保つ最大の動力ではないかということであった。この気持ちはまちを離れた人々にも根強く、また、若い世代の間にも、「わがまちからの発信」を活発に行なう気運が充満しているようである。

都市化していく中で、まちなみ景観を保全していくためには、尼崎市のように、行政の側が主導的な役割を担っていく必要がある。これは築地地区に見られ

るように、新しい事業として美的な景観を作り出していく方向と、たとえば「まつり」といった形で地域の行事を支え、住民にみずからの地域社会への関心を持たせる方法とが考えられる（東京葛飾地区柴又や大阪市平野区の例）。伝統あるまちなみにせよ、新しく創られたまちなみにせよ、この保全のためには住民の中に新しい「愛郷心」を育てることが大切であろう。

### 3. おわりに

本論では以上のほか、まちなみ景観と「観光事業」や「快さ」について述べているが、紙面の関係で本稿では割愛する。そのほかに見学した3地区を外国の諸都市と比較して気づくのは街路樹がない、あるいは少ないことである。伝統的なまちなみに街路樹は適さないのかも知れない、しかし、景観形成地区の中に現代的な建物が混在するような場合の、景観的「緩衝」手段として、家並から張り出した形で樹木を配するののも一つの工夫かと思われる。今後、新たに創られるまちなみでは、町中での「癒し」の観点からも、「街路樹を配した景観」をぜひ考慮していただきたいと思う。

(文責：苗村)

## 第19回 知的サロン 2011年6月16日

### 『生駒に伝わる三つの伝説』

野口 民治

第1話 神亀2年(725)、生駒市北部の上地区で聖武天皇が狩りを催した際、この辺りに居住する小野真弓長弓とその子、長麿も参加した。このとき、不思議な鳥が現れ、長麿がこれを射止めたが、その余り矢が父、真弓長弓に当たり落命した。天皇はこの供養のため行基に命じて寺を建立、真弓山長弓寺と命名した。別説は、怪鳥が群れを成して田畑や穀物を荒らすので、聖武天皇がこれを射取るため狩りをした。すると怪鳥は黄金の鷹に変わってすぐ北の高山に留まり、八幡大菩薩になった。このとき、天皇の馬が動かなくなったので、誓いを立てて後日、行基に寺を建立させた。そのとき天皇が持っていた弓に因んで長弓山と号した。長弓寺は生駒市上町にあり本堂(国宝)は弘安2年(1279年)建立の銘がある。この伝説からは8世紀ごろ、この辺りが鳥の棲息地であったことが窺える。なお、行基の墓(国指定史跡)は生駒市にあって、初期の布教活動もその一帯で行ったとされるが、これは第

2話の舞台の近くである。

第2話 役小角は若い頃から金剛、葛城、生駒の山中で修行していた。生駒山では人々を悩ませていた鬼を改心させ、剃髪得度して弟子にした。この鬼は前鬼、後鬼(694年)

あるいは善童鬼、妙童鬼(672年)などと呼ばれ、剃髪させた場所は暗峠の東西に位置する髪切山慈光寺(東大阪市)あるいは鬼取山鶴林寺(生駒市)である。のちに大峰山中に移住させ、修行者達を助けさせた。この前鬼、後鬼は役行者の絵や像の左右に従者として配置されている。いわゆるオニのイメージはなく、普



暗峠(生駒市)

通の人間である。当時、生駒山一帯には平地で農耕を営む人々とは異なった生活スタイルをもつ人々が相当数住んでいて、両者の生活文化の違いが平地人からみた「オニ」の意識であったか考える。

行基（668～749）と役小角（伝 634～701）はともに山林修行者、民衆救済に関連する土木事業に関わった共通点がある。行基は民衆への布教を理由に都から追放され、役小角も民衆の支持が強いことを嫉まれ「民を惑わす、反逆の意図あり」として罪に問われている。二人の生きた時代は重なっており、どこかで顔を合わせていたかもしれない。

第3話 神日本磐余彦天皇（以下：磐余彦）は東方によい土地があると聞き、兄たちと計らった上、船団を率いて東方へ向かった。河内国草香邑に着いて、竜田の道が険しかったので生駒山を越えて中州に入ろうとした。これを知った長髓彦は「これはわが国を奪うつもりだろう」と考え、孔舎衛坂で迎撃した。磐余彦の軍勢は敗れ、船で紀国から熊野へ廻った。ここで高

倉下に助けられ八咫鳥に導かれて山中を吉野、宇陀へ向かい、途中の抵抗勢力を征服したのち、再び長髓彦と戦った。このとき、金色の鵄が飛んできて長髓彦軍の目を眩ました。

長髓彦側の饒速日は長髓彦の妹婿であったが、磐余彦が神の子孫であると理解し、長髓彦を殺し、衆徒を引き連れて帰順した。磐余彦は橿原で帝位に即き、饒速日は自分と同じく天神の子孫であると知っていたので寵遇した。これが物部氏である。

長髓彦の本拠地とされるのが生駒の田原、白庭地区で第1話の舞台と隣接している。田原地区では縄文時代の遺跡が発見されていて、古くから狩猟、採取の生活をする人が住んでいたことがわかっている。

この長髓彦の一族が従来の生活スタイルを持ったまま山中にとどまり、これが「生駒のオニ」とされたのではないか。三つの伝説のつながりを考えると面白い。（文責：松原）

## 「第5回総会から」

### ◆「代表世話人」の通称を「代表」に

当学会の正式の代表者役職名は、会則9条により「代表世話人」となっています。しかし「代表世話人」という役職名称は、対外的にあまり一般的でなく、また馴染みにくいため、今後は、会則の規定はそのままに、通常使用する場合は「代表」とすることが了承されました。

### ◆「学会発足5周年記念行事」について

7月の総会で実施が決まった「学会発足5周年記念行事」について、総会では記念講演会や記念（見学会）旅行などのアイデアが出されました。9月の世話人会で協議の結果、岡山県吹屋（重要伝統的建造物群保存地区）の見学旅行となりました。具体案が決まりましたらご連絡いたします。

## 第1回 研究会

2011年09月15日

世話人 塩野勝/中川政美

「高齢者問題」の第1回は参加者12名、まず研究会の進め方を協議。フリートークを手がかりに「高齢者問題」を考えていくことになりました。次回はフリートーク「私の健康法」です。



## あとがき



生駒に伝わる伝説のお話は、生駒と縁の深い行基と役小角の話、それと神武東征にまつわる長髓彦（ナガスネヒコ）のお話でした。行基と役小角はほぼ同じ世代に生き、いくつかの共通点を持っていることなど、はじめて聞くことが多く、古代に興味がわいてきました。